

『統夷堅志』 訳稿 (一)

高津 孝

本稿は、金・元好問『統夷堅志』の訳稿である。本文は、『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』（古體小説叢刊、中華書局、一九八六年。二〇〇六年第二版）に収録された常振國点校テキストによる。元代の跋文六篇の訳を最初に置き、その後、本文の訳を置く。また、人名、地名の同定には、李正民『續夷堅志 評注』（山西古籍出版社、一九九九年）を参考とした。本書は、『統夷堅志』中の記事を異人異事類、史料類、生理医薬類、文物類、動植物類、自然現象類の六種に分類し、評注を加えたものである。

『續夷堅志』のテキストの伝来はかなり複雑である。以下、常振國の点校説明に従って記述する。『統夷堅志』は、元好問によって執筆されたのち、モンゴル時代に北方で出版された。記事に記された最も遅い年号は「辛亥（一二五一）冬」（卷三

「抱陽二龍」）であるので、元・憲宗・元年（一二五一）以降の出版である。元・寧宗・至順三年（一二三三）に呉中の王東が刊本を入手し書写した。それに宋无、石巖が跋文を加えた。宋无跋文には「四卷」、王東跋文には「四冊」とあるので、当時の刊本は四巻本であったらしい。元・順帝・至正八年（一二四八）に、『金史』が出版され、王東は『金史』の元好問伝を「本伝」として書写本に付け加えた。その後、王東抄本は、夏侯芥甫の所有となり、至正二三年（一二三三）に華亭の孫道

明がそれを借用して書写し二巻に改めた。宋无跋文には元好問自序が存在したことを述べるが逸した。現存するテキストには、杭郡の余集が読易楼所蔵の二巻本を入手し、改めて四巻本に編纂し直した大梁書院本（嘉慶十三年（一八〇八）刊）、大梁書院本に基づいて校正を加えた『得月簃叢書』本（道光十年（一八三〇）刊）と中国国家図書館所蔵の清抄本二巻本がある。中華書局本は、『得月簃叢書』本に基づき、大梁書院本、中国国家図書館所蔵清抄本を用いて校正が行われている。大梁書院本は、『續修四庫全書』第一千二百六十六冊に影印収録され、中国国家図書館所蔵清抄本は、『四庫全書存目叢書』子部第二四六冊に影印収録され、利用しやすくなっている。

なお、本稿は、平成二十九年より始まった、九州、広島地区の宋代史研究者の集まりである宋代文献研究会での会説に提供し、貴重な意見を受けた結果である。参加者各位に感謝する。

金・元好問『統夷堅志』

王東跋

予が鈔する北地棗本『統夷堅志』四冊は、實に遺山先生の撰する所なり。至正戊子に、武林に新たに『金史』を刻し、獲るに因りて一觀す。謹みて此の『傳』を贍し、書する所の後に附すと云ふ。是の年の花朝の日、吳下の王東起善識す。

王東の跋

私が書写した北地の刊本『續夷堅志』四冊は、まさしく元好問、遺山先生の著作である。元の至正八年（一三四八）に、武林で新たに『金史』が出版されたが、私はそれを入手して一覽した。謹んでその中の元好問の伝記をここに書き写し、書写した『續夷堅志』の後に付け加えた。至正八年（一三四八）二月十五日、吳下の王東、字起善が記す。

宋无跋

遺山、中原の人なり。使し宋の熙、豊の間に生じたれば、蘇、黄諸人と時を同じくし、當に大いに聲有るべし。不幸にして完顔の國を有つの日に出づ。偏方なるも文を以て戎事を飾り、科擧を用ゐて人を選ぶと雖も、惜しいかな、又た貞祐の前後に在りて、其の賤牒の文柄を掌するを得ず、故に閑居著述す。其の文と詩詞とを觀るに、宏肆軼宕たり。其の國人を傳ふる所に及んでは『中州集』と號し、人ごとに各おの傳有り、其の顛に其の行業仕隱を敘し、詩は則ち一聯も遺さず。宋の士夫の其の國を淪陥せし者、概ね末に見ゆ。文に史法有りて、其の好義樂善の心は、蓋し廣し矣。續くる所の『夷堅志』は、豈に但だに洪景廬を過ぎるのみならんや、其の自序に見るべき也。惡善懲勸、纖細に必ず録し、以て風俗を知り人心を見るべきにして、豈に南北の間有る哉。北方の書籍は、率ね金の刻する所なるも、江南に至るは罕なり。友人王起善之を見て、亟かに鈔して帙を成せば、其の學は富み筆は勤たること又た知るべし矣。持して以て予に示すに、時日は將に夕ならんとし、讀みて丙夜に至り、

四卷を盡くす。深く予が心に啟する有り。病を以て鈔すること能はず、姑く卷末に識して之を歸す。壬申の歳の除、商邱宋无子虚沙頭に白漚の眠る處に書す。

宋无の跋

遺山（元好問、一一九〇—一二五七）は、中原の人である。もし彼が北宋の熙寧（一〇六八—七七七）、元豐（一〇七八—八五）年間に生まれていたら、蘇軾（一〇三七—一一〇二）、黄庭堅（一〇四五—一一〇五）らと同時代になり、きっと名声を得ていただろう。不幸にして完顔氏の王朝である金朝に彼は生まれた。金朝は地方政權であるが軍事を文飾し、科擧を用いて人材を登用したが、惜しいことに、元好問は貞祐年間（一二三三—一七）「モンゴルの侵攻を受け、中都が陥落、王朝が衰亡へと向かう時期」の前後の危機的状況の時代に遭遇し、王朝に仕えて宮廷文書を統括する機会を得ず、そのため、人を避けて独居し著述に励んだ。元好問の文章、詩詞を拝見すると、氣宇壮大で變化に富む。金朝の人の伝記を作成することでは、『中州集』と名付け、人ごとに伝記を作成し、最初にその人物の徳業、業績、出仕と引退を述べ、詩については一聯も余すところなく引用した。南宋の士大夫が金朝を陥れたことは、おおよそ、『中州集』の卷末に見えている。文章には歴史家の規範が存在しており、元好問の、義を好み、善を樂しむ心は、なんと広いことか。『夷堅志』続編は、ただ単に洪邁『夷堅志』を超えているだけではないことは、その自序によくあらわれている。惡を懲しめ善を勸める觀點が、細やかに記録されており、

人々の風俗を知ること、人々の心が分かるというものであり、どうして中国の南北の間に差があるのか。北方の書籍は、おおむね金朝で出版したものであり、江南にもたらされるものは極めて稀である。友人の王東は『統夷堅志』を見て、すぐに書写して製本して帙に入れたことから、彼が博學で筆まめであることが分かる。『統夷堅志』写本を私のところに持ってきて見せてくれたので、夕方になろうとする時刻から読み始め、夜中までかかって四巻を読み終え、啓発される点が多かった。病気のため、書写することができず、とりあえず巻末に跋文を識して返却した。壬申（元・至順三年、一三三二年）の歳の十二月、商邱宋无子虚中洲の砂浜で白い鷗が眠るところで書き記す。

吳道輔跋

中州曾て歴覽するに、底處いづこにか孤墳こふんを覓めん。勛業元より我無し、文章もて數君を正す。淵源は『史』、『漢』に由り、警策は機、雲に出づ。予も亦た奇を尚ぶ者にして、何の期にか見聞を廣めん。吳道輔、景文。

吳道輔の跋

『中州集』を以前全部読んだことがあるが、一体どこに祭祀の対象となっていない墳墓があるのか（優れた功績を挙げた人物は後世から必ず評価され、厚い祭祀の対象となっているよう

1 孤墳…孤独な或いは祭祀を行う人のいない墳墓。唐劉長卿『過裴舍人故居』詩「慘天寒獨掩局、紛紛黃葉滿空庭、孤墳何處依山木、百口無家學水萍。」

に、金代の優れた人物はすべて『中州集』に取り上げられている。元好問の功績は元來、自分のためではなく、文学の力で数名の君主に諫言を呈した。彼の文学の淵源は『史記』、『漢書』によるもので、文学的警句は西晋の陸機、陸雲兄弟に出るものである。わたくしも奇異な事を尊ぶもので、何の日か見聞を広め、元好問に続けたい。吳道輔、景文。

眭廡叟跋

子思子云ふ、「國家將に興らんとするや、必ず禎祥有り。國家將に亡びんとするや、必ず妖孽有り」と。洪景盧『夷堅志』は政、宣の事多く、元好問『續志』は、泰和、貞祐の事多し。其の平世に視くべ間有る耳。眭廡叟。

眭廡叟の跋

子思子は「國家が勃興しようとするときは、必ず瑞祥があり。國家が滅びようとする時は、必ず不吉な前兆がある」と言っている。洪邁『夷堅志』には北宋末の政和（一一一一―一一一八）、宣和（一一一九―一二五）年間の記事が多く、元好問『續夷堅志』には、金朝の泰和（一二〇一―一〇八）、貞祐（一二二一―一二二一）年間の記事が多い。それらの時代は太平の世に比べて遠いがあるのである。眭廡叟。

2 『禮記』中庸「國家將興、必有禎祥、國家將亡、必有妖孽」。

石巖跋

吳中³の王起善は博學にして且つ勤なり、人に異書有れば、必ず手づから之を抄す。此れ其の一也。按ずるに、『續夷堅志』は乃ち遺山先生 中原陸沈の時に當りて、皆な耳聞目見するの事にして、洪景盧の演史寓言の若きに非ざる也。其の勸善戒惡は、補ふ無しとは為さず。吾れ知る、起善の推廣の心は、即ち遺山の心也と。至順三年、朱方⁴の石巖民瞻氏識す。

石巖の跋

吳の王東、字起善は博學で勤勉であり、人が変わった書物を持っていくと、必ず自ら書き写した。本書はその一つである。思うに『統夷堅志』は、遺山先生（元好問）が金朝滅亡の時に当たって、皆な実際に見聞きしたことで、洪邁『夷堅志』のような講談やたとえ話ではない。その勸善懲惡は、良くないわけではない。王東のそれを広めようとする心は、遺山（元好問）の心であると私は知っている。至順三年（一二三二）、朱方の石巖民瞻氏識す。

孫道明跋

遺山先生『續夷堅志』二卷は、乃ち吳中の王起善の鈔本にして、今、芥甫夏侯に歸す。至正二十三年癸卯歲閏三月十七日丁亥借録し、四月七日丙午に至りて、泗北村居映雪齋に録し畢ん

- 3 吳中…今の江蘇蘇州一帯を指す。また、広く吳の地方を指す。
- 4 朱方…春秋時代、吳の地名である。治所は今の江蘇省丹徒県東南。

ぬ。華亭在家道人孫道明明叔、時に年六十有七也。

孫道明の跋

遺山先生（元好問）『續夷堅志』二卷は、吳の王東、字起善の鈔本で、今、夏侯芥甫の所有物になっている。至正二十三年（一二三三）癸卯歲閏三月十七日丁亥に借りて書写を行い、四月七日丙午になって、泗北村居映雪齋において書写し終わった。華亭の在家道人孫道明明叔、時に年六十七である。

卷一

1. 1 鎮庫の寶

趙王の鎔、丹を煉して成るも、餌するに及ばずして、之を鎮州⁶の庫藏中に藏する者^と三百年に餘る。貞祐⁷の初め、真定⁸、元帥三喜城を棄て、之を取りて以て行く。行きて平陽⁹に及び、胥莘公¹⁰の効する所と為り、之を收む。丹は汴京に入り、豐衍

- 5 趙王の鎔・王鎔（八七四―九二二）、唐末五代の成德節度使。朱温が後梁を建国、王鎔を趙王に封じた。
- 6 鎮州…今の河北正定。
- 7 貞祐…一二一三―一七、金宣宗の年号。
- 8 真定…今河北正定。
- 9 平陽…今の山西省臨汾市。
- 10 胥莘公…胥鼎（？―一二二四）金朝の大臣。字和之。大定年間の末に、進士及第、至寧元年（一二一三）に、戸部尚書から參知政事となる。宣宗が即位し、モンゴル兵が中都を包圍した時、知大興府事兼中都路兵馬都總管となった。莘国公を授けられ、興定四年（一二二〇）に致仕した。

庫¹¹に下し收め、名色は之を「鎮庫寶」と謂ふ。京城の變¹²の後、予は戸部主事劉彥卿¹³と同一¹⁴に往きて之を觀る。丹は漆櫃を以て盛り、旁に「廣成子¹⁴問道像」を畫く。中に復た漆合有り、高さ五寸、闊¹⁵三寸。合の蓋上に九環を作り、外は八中は一にして、金を以て之に塗り、各おの流「去聲」道¹⁵の相貫く有り。環中に小孔を作るは、予意へらく其れ九轉¹⁶為る也。合中復た銀合有りて丹を盛る。合の蓋上に鏤佛一、左龍右鳳、佛座の下に在り。亦た皆な金もて塗る。開きて視れば、丹の體は殊に軽く、合中に周匝し、色は棗皮漆の如く、而して裂罍¹⁷縦横にして、絶へて今世の丹砂と相似ず。予意として頗る之を輕んじ、庫を主る者に問ふ、「此れ何の異有らん」と、曰く、「他無し、但だ陰晦中に恒に光怪を出し、火の起りて然ゆるが如き耳」と。壬辰年¹⁸に親しく見る。

- 11 豊衍庫…『金史』卷五十六・百官二に「南京豊衍東西庫」。南京開封府は、汴京である。
- 12 金・哀宗・天興元年（一二三二）壬辰は、三月にモンゴル軍が汴京を包圍、和議を結ぶ。五月疫病が發生、九十余万人の軍人が死亡。七月モンゴルの使者を殺し、和議決裂。閏九月食糧不足、汴京城内では人肉食も現れる。十二月金・哀宗は汴京を放棄。
- 13 未詳。
- 14 『莊子』在宥篇に、黄帝と古の仙人である広成子との問答がある。
- 15 未詳。『広韻』、『集韻』、遼・行均『龍龕手鑑』（元和古活字本）には、「流」字に去声無し。
- 16 晋葛洪『抱朴子』金丹「九轉之丹服之、三日得仙」。
- 17 裂罍…器物のひび割れ模様。
- 18 金・哀宗・天興元年（一二三二）、四三歳。元好問は、汴京で左司都事。

鎮州庫藏の宝物

後梁王朝で、趙王に封ぜられた王鎔は、仙人になるための丹薬を精製したが、自ら服することはなく、結局、丹薬は鎮州の庫藏中に保管されること三百余年にもなった。貞祐年間（一二三一—一七）の初め、真定元帥の三喜がモンゴル軍の猛攻で真定府（鎮州）城を放棄した時、丹薬を取りだして持って行った。彼が平陽に行き着くと、「知大興府事兼中都路兵馬都総管に任せられた」胥鼎に弾劾されて、丹薬は没収された。「貞祐二年、三月モンゴル軍に中都を包圍された金・宣宗は和睦を選び、五月南京（開封府）に遷都した」。丹薬は開封府に入り、豊衍庫に收められ、名前を「鎮庫宝」と言った。京城の変（天興元年、一二三二）の後、わたしは戸部主事劉彥卿とともに豊衍庫に行つて丹薬を見た。丹薬は漆の櫃に入れられ、箱の横には「広成子問道像」が描かれていた。中にまた漆の香合があり、高さ五寸、ひろさ三寸で、香合の蓋の上に九つの環がついており、外に八つ、中に一つで、金で塗られており、それぞれ流「去聲」道で貫かれていた。環の中に小さい孔が作られているのは、おそらく九轉を意味するのであろう。漆の香合の中にはまた銀の香合があつて丹薬が収められていた。香合の蓋の上には鏤佛が一体、佛座の下には左に龍、右に鳳がいる。同様に金で塗られていた。開いてみると、丹薬の本体は大変軽く、香合の中にとぐろを巻くように収まっており、色は棗皮色の漆のようで、ひびが縦横に入っており、全く今の世の丹砂と似ていない。わたしは気持ちとして、この丹薬を輕んじ、倉庫の管理人に、「普通の丹薬とどこが違うのか」と質問したとこ

ろ、「他でもない、ただ暗闇で常に怪しい光を発し、燃えているようであるだけだ」と答えた。天興元年（一二三二年）に自ら実見した。

1. 2 金獅猛し

正大初、張聖俞¹⁹舞陽縣²⁰北街に客たり。一日、家婢一弓手家従り一牛腰腎を買得たり。刀を以て之を割くに、刀入ること能はず。剥きて之を視るに、一石を得、獅形を作す、色は泥金²¹の塗る所の如く、前の一蹄は屈して内に向ひ、一蹄は之を枕にして睡る。夜夜光有り。高さ二寸餘り。殆んど異氣の化する所を乗るなり。聖俞の嫂吳之を收む。今の存否を知らざる也。聖俞説けり。

金獅の猛しさ

正大年間（一二二四—一二三二）の初め、張聖俞は舞陽縣の北街に滞在していた。ある日、家の小間使いが弓の使い手の家から一切れの牛の腰肉を買った。刀で割こうとするが、刀が入らない。剥いてみたところ、一個の石が得られた。形は獅子で、泥金を塗ったような色をしており、前脚の一本は内側に曲がり、もう一本を枕にして睡っている。毎晩光を放った。高さ二寸餘りで、おそらく異様な気の変化したものを取り集めたものであ

ろう。聖俞の兄嫁の吳氏が手に入れたが、今のその存否を知らない。張聖俞が述べた。

1. 3 康李の夢應ず

康伯祿²²、李欽叔²³、壬辰²⁴冬十二月河中²⁵を行部²⁶す。城の未だ破れざるに先んじ、一日、康と欽叔とは其の神に求夢す。伯祿は夢みるに、城隍破れ、船を争ひて水中に落ち、一錦衣の美婦の之を援けて去るところと為る。美婦援け出すに、滿眼皆桃花なり。欽叔夢みるに、人桃符²⁷二を與ふるに、上に『宜しく新年に入りて』『長命富貴なるべし』と寫す。明日城陥ち、伯祿は、船を争ふに上るを得ず、落水して死す。李は船を得て、

22 康伯祿・康錫、字伯祿、趙州（河北省）の人。河中路治中となり、河中府が陥落すると、將兵を率いて南に逃れ、黄河を船で渡る時に、船が壊れて水死した。『金史』卷一一。

23 李欽叔・李猷能、河中の人、貞祐三年（一二一五）の進士。鎮南軍節度副使として河中に赴任し、河中府が陥落すると、陝州に逃れた。『金史』卷一二六。

24 金・哀宗・開興元年（一二三二）が四月十九日に天興と改元された。三月にモンゴル軍が汴京を包圍、和議を結ぶ。五月疫病が發生、九〇余万人の軍人が死亡。七月モンゴルの使者を殺し、和議決裂。閏九月食糧不足、汴京城内では人肉食も現れる。一二月金・哀宗は汴京を放棄。

25 今の山西省永濟県蒲州鎮。

26 行部…所属する地域を巡視し、地方官の成績の審査を行うこと。

27 桃符…五代の時に桃の板の上に聯語を書いたもの、後に紙に書くようになり、春聯と呼ばれた。

19 張聖俞・張謙德、字聖俞、号新軒。東平（山東省）の人。中台椽となり、文章家として有名であった。

20 舞陽…今の河南省舞陽縣。

21 金箔とニカワから作られた金色の顔料。

陝縣²⁸に走ぐ。三四日にして歳を改む。陝令楊正卿²⁹人をして桃符を送らしむるに、書く所は、夢中に云ふ所の如し。正卿説けり。

康伯祿、李欽叔の夢の実現

康伯祿、李欽叔は、金・哀宗・天興元年（一二三二）の冬十二月に河中府を巡視していた。「ちょうど、その時、モンゴル軍が河中府を包圍した」。河中府が陥落する前、ある日、康伯祿と李欽叔とは河中府の神さまに夢のお告げを求めた。康伯祿は次のような夢を見た。河中府の城壁は突破され、誰もが争って船に乗ろうとして水中に落ちた。一人の錦の衣をまとった美しい婦人が康伯祿を助けて去っていった。美しい婦人が康伯祿を助け出す時、康伯祿にはあたり一面の桃花が目に入った。李欽叔は次のような夢を見た。ある人が二枚の桃符（春聯）をくれたが、上に『宜しく新年に入り』『長命富貴なるべし』と書いてあった。翌日、河中府は陥落し、康伯祿は、争って船に乗ろうとしたが乗れず、水に落ちて死んだ。李欽叔は船を手に入れ、陝県に逃げのびた。三四日たつて新年を迎えた。陝県令の楊正卿が人を派遣して李欽叔に桃符を贈って来た。書かれている文は、夢の中で言われたままであった。楊正卿が語った。

28 陝県…陝州である。今の河南省三门峡市。

29 楊正卿…楊果（一一九七—一二六九）、字正卿、号西庵。祁州（河北省保定）の人。金・正大元年（一二二四）の進士。元朝では北京宣撫使、參知政事となった。『元史』卷一六四。

1. 4 包女嫁するを得たり

世俗に傳ふるに、包希文³⁰は正直を以て東嶽³¹速報司³²を主る。山野の小民、知らざる者無しと。庚子³³秋、太安³⁴界の南征兵³⁵、一婦を掠して還るに、是れ希文の孫女なりと云ひ、頗る姿色有り。倡家³⁶高價にて之を買はんと欲するも、婦死を守りて行かず。主家其の財を利とし、捶楚³⁷備く至り、婦は遂に病む。鄰里嗟惜するも救ふ能はず。里中の一女巫³⁸私に人に謂ひて云ふ、「我能く此の婦を脱し、良人に適かしむ」と。即ち主家に詣りて、目を閉じ吁氣³⁷し、屈伸良久³⁸しくして、神降しの態を作す。之を少して、瞑目して咄咄し、主人なる者呼び出して、大いに之を罵る。主人は香火を具へ、俛伏して罪を請ひ、何の尊神に觸るる所なるかを問ふ。巫又大いに罵して云ふ、「我は速報司なり。汝は何ぞ敢て我が孫女を以て倡と為すや。汝に十日を限り、之を良家に嫁せずんば、吾れ汝が門を滅せん³⁸矣」と。主家百拜して謝し、數日ならずして之を嫁す。

30 包希文…包拯（九九九—一〇六二）、字希仁、廬州合肥（安徽省合肥）の人、北宋の名臣。名裁判官として後に小説化される。

31 東嶽…泰山を指す。

32 速報司…あの世で東岳大帝の配下として善悪因果応報を司る役所。因果応報が迅速なことで命名された。

33 元・太宗・一二年（一二四〇）庚子。金朝の滅亡後七年。

34 太安…泰安（山東省）。金・天会十四年（一一三六）に、泰安軍が設置され、金・大定二十二年（一一八二）に泰安州となった。

35 「兵」字、清抄本では空格。

36 倡家…妓女を言う。

37 吁氣…嘆息する。

38 滅門…一族を皆殺しにする。

包家の娘の嫁入り

世間の伝承であるが、包拯は正直な事で東嶽速報司という冥界の役所を司ることになった。山野に住む一般庶民は誰もがこのことを知っている。元・太宗・一二年（一二四〇）の秋、（モンゴル軍の）太安州あたりに南征した兵隊が一人の婦人を誘拐して戻って来た。彼女は自分が包拯の孫女であると述べ、器量好しであった。置き屋は高額で彼女を買い取ろうとしたが、彼女は死を覚悟して拒絶した。主人は、彼女を売って得られる利益を考え、鞭で打つなど様々な刑罰を科し、とうとう彼女は病気になった。近所の人は彼女をかわいそうに思ったが、救えなかった。村の女巫がひそかに人にこう言った、「私は彼女をこの境遇から助け出し、良い旦那に嫁がせることができる」と。直ちに主人のもとに行き、目を閉じて嘆息し、しばし屈伸運動をして、神降しの様子になった。しばらくして、目をつむったまま叱りつけ、主人を呼び出して、大いに罵った。主人は香や灯火をお供えして、うつぶせになって罪を請ひ、何が神様の怒りに触れたかを訊いた。巫はさらにひどく罵って「われは速報司である。お前は どうしてあえて我が孫女を妓女にするのか。お前に十日の猶予をやる。娘を良家に嫁がせなかったなら、わたしはお前の一族を滅ぼすだろう」と言った。主人は百拜して過ちを謝罪し、数日も置かず彼女を嫁に出した。

1. 5 鐵中の蟲

吾が州³⁹の會長老、飛狐⁴⁰の團崖に住す。初めて院に入るに、典座⁴¹の僧白す、「廚堂の一鑊は、千人に供すべきも、火を燃せば則ち聲有り。今二年なり矣。人以爲らく、釜鳴るは不祥、廢して敢て用ゐずと。大眾⁴²の作食を妨ぐるは、師如何せんと欲す」と。會云ふ、「吾、大眾に就きて此の鑊を乞ふ。當に我に任せて料理せしむべし」と。眾諾す。乃ち椎もて釜の底を破るに、穴中に一蟲を得たり。長さ二寸許^{ばかり}、色は深赤なり。蓋し此の蟲は火を經れば則ち聲有り。淄川の楊叔能⁴³も亦た嘗て、芒山⁴⁴均慶寺の大鑊一竅を破ること、拳を合したるが如く、中に一蟲有りて蟬螞⁴⁵の如くして紅きを見る。此の類大家⁴⁶往往にして之を見る。魏文帝⁴⁷『典論』以爲へらく、「火の性は酷烈にして、理として生物無し」⁴⁸と。特だ執方⁴⁹の論なるのみ。團

39 忻州。元好問は忻州の出身。

40 鼎の名。今の河北省保定市涿源県。

41 典座・寺院の職名。食事を担当する。

42 大眾・佛教で信徒たちを指す呼び方。

43 楊叔能・楊弘道（一一八九—？）、字叔能、号素庵、著作に『小亭集』がある。淄川（山東省）の人。

44 河南省永城市東南。

45 蟬螞・コガネムシの幼虫。

46 大家・多くの人々。

47 魏文帝曹丕（一八七—二二六）。三国時代の著名な政治家、文

学家で、魏王朝の開国の皇帝（二二〇—二二六在位）。

48 現存する『典論』中にはない。『法苑珠林』卷五三「魏文帝以

爲火性酷烈無含養之氣。著之典論刊廟門之外」。

49 執方・通常の規則に照らして事に対応する。隋王通『中説』

周公「子曰、通變之謂道、執方之謂器」。

崖の事は、全唯識記す。

鐵中の蟲

我が忻州の會長老は、飛狐県の团崖院に住持していた。团崖院に入ったばかりの時に、典座（食事係）の僧が次のように述べた、「お寺の厨房の一つの鉄鍋は、千人分の食事を作れる大きさですが、火を燃やすと音がします。今年で二年になります。釜が鳴るのは不祥であるから、廃棄してあえて使用しないようにしようと考えている人がいます。僧侶たちの食事に触りが出ますが、お師匠様、どういたしましょう」。會長老はこう言った、「私が僧侶の皆さんからこの鍋を貰い受けましょう。私に任せて処理させるのが適切です」。僧侶たちは承知した。そこで、會長老は椎で釜の底を壊したところ、穴の中に一匹の虫がいた。長さ二寸ばかり、色は深紅である。おそらくこの虫が火にあぶられて声を出していたのだろう。淄川の楊叔能も、以前に、芒山均慶寺の大鍋を壊して、拳二つほどの穴を開けたところ、中にコガネムシの幼虫のように赤色の虫を見つけた。こういったものは、多くの人々がしばしば目に見ている。魏文帝・曹丕『典論』には「火の性質は苛烈であり、当然のことながら生物はそこに存在しない」と述べている。これは単に一般論を述べただけである。团崖院での出来事は、全唯識⁵⁰が書き記している。

50 評注によれば、上海図書館所蔵『続夷堅志』呉継寛抄本では「金唯識」。

1. 6 王増壽外力

秀容⁵¹東南雙堡の王増壽、號して外力と爲し、角觝を善くし、人能く敵ふ莫し。太和の末、官駝を括す⁵²。増壽詭計を作し、駝の足を釘⁵³（去聲）し跛たらしめ、羊頭村自り背に駝を負ひて代州⁵⁴に至る。州守信⁵⁵に以て然りと爲し、増壽復た之を負ひて歸る。樊帥⁵⁵説けり。

王増壽、別名外力

秀容（山西省忻州市忻府区）東南の双堡の王増壽は、「外力」（特別の力あるもの）と自称しており、相撲がうまく、敵うものはいなかった。泰和年間（二二〇一—二二〇八）の末、役所がラクダを輸送用に徵発した。王増壽は自分の所有するラクダの足を釘を打ち付け歩けないようにし、担ぎ上げて羊頭村から代州

51 秀容二「後魏置。爲秀容郡治。故城在今山西忻縣西北五十里。齊周時郡廢。隋徙縣於九原故城。明省。即今山西忻縣治。」（『中国古今地名大辭典』商務印書館香港分館、一九三二）

52 『金史』一〇・本紀一〇・章宗・明昌六年（一一九五）三月

「戊戌、以北邊糧運、括羣牧所、三招討司猛安謀克、隨亂及迭刺、唐古部諸抹、西京、太原官民駝五千充之、惟民以駝載爲業者勿括。」

53 『広韻』下平一五青「當經切。釘、又都定切。」去声四六径「丁定切。釘、又得庭切。」

54 代州・「隋置。見代縣條。（『中国古今地名大辭典』）「代州即今忻州市代縣、位於山西省東北部、北踞北嶽恆山餘脈、南跨佛教聖地五台山麓。代縣文物古蹟遍佈、雁門關居九塞之首、天下聞名。隋改爲代州。大業初曰雁門郡。唐復曰代州。天寶初亦曰雁門郡。乾元初復故。中和二年、置雁門節度治此。」（地名規範資料庫）

55 樊帥・樊天勝。元代の鎮国上將軍、九原府元帥。『定襄縣志』。

(山西省忻州市代県) まで運んだ。代州の守將は王増寿のラクダが本当に歩けないことを認めたので、王増寿は再度ラクダを担いで帰った。樊帥が述べたことである。

1. 7 石中の蛇蠍

太和中、柏山長老志賢は、西京の東堂に住み、常住足備すれば、即ち棄去す。渾源⁵⁶の樂安橋嶺路を修するに、一牛心大の石を槌破せり。中に蛇蠍有りて相吞蝥す、人其の何従り入るかを知らざる也。賢曰く、「此れ吾が法に在りては、是れ怨毒の化する所にして、想⁵⁷に隨ひて入り、千萬劫を歴るも解き得ざる者なり。若し為に解却せずんば、他日亦た曾て我を見來⁵⁸れりと道はん」と。即ち大杖を以て之を撃つに、竟に他異無し。全唯識説けり。

石中の蛇と蠍

泰和年間(一一〇一—一〇八)、柏山長老志賢は、金の西京(山西省大同市)の東堂に住んでいたが、(喜捨を得て)寺の財物が十分に足りるようになると、すぐにその寺を去っていった。渾源の樂安橋の嶺路を修築する際に、一頭の牛の心臓ぐらゐもある大きな石を槌で壊したところ、石の中には蛇と蠍^{ササリ}がいて、お互いに蛇は蠍を飲み込み、蠍は蛇を刺していた。誰もこの蛇と蠍がどこから石の中に入り込んだかを知らなかった。志賢は

56 渾源…山西省大同市渾源県。

57 想…『般若心経』「受・想・行・識・亦復如是」。

58 來…過去を表す語氣助詞。現代語の「来着」。

次のようにいった、「仏法の教えでは、これは人の怨念が変化したもので、怨念とは想(表象作用)によって我々の心の中に入り込み、永遠の時を経ても解き放つことができないものである。もしここでこのもののために解き放つてしまわないと、いつの日かまた、以前に志賢に会ったことがあると言うだろう。」直ちに大きな杖で打ったところ、意外にも、他の異変は生じなかった。全唯識は述べている。

1. 8 任氏翁媪

定襄⁵⁹の沙村は、樊帥⁶⁰の居する所なり。説けり、「里中の任實^{およ}泊^{およ}び其の妻張氏は、七十三歳にして、同年月日時に生まれ、復た同年月日時に死す。古今有ること無き所なり」と。

任氏の老夫婦

定襄の沙村は、九原府元帥の樊天勝の居住地である。樊天勝は次のように語った。「沙村の任実とその妻張氏は、七十三歳であるが、同年同月同日同時の生まれで、同時に同年同月同日同時に亡くなった。前代未聞のことである」。

59 定襄…今の山西省定襄県。

60 樊帥…樊天勝、かつて定襄知県を勤め、九原府元帥となった。

『山西通志』卷九十八・名宦十六・元「樊天勝、定襄人。以武功授九原府元帥。知定襄郡時、從常山軍取忻州。大帥怒其民、欲盡戮之。天勝哀訴得免」。

1. 9 鄭叟土禁を犯す⁶¹

平輿⁶²の南函頭村の鄭二翁、資性強く、禁忌を信ぜず。太和八年、其の家の東南に興造する所有り。或ひと言ふ、「是れ太歳⁶³の在る所にして、犯すべからず」と。鄭云ふ、「我れ即ち太歳なり。尚ほ何ぞ忌まんや」と。役夫を督して興作せしむ。地を掘ること二尺ならずして、婦人の紅繡鞋一雙を得、役夫作を罷めんと欲す。鄭怒り、取りて之を焚き、地を掘ること愈いよ急なり。又二三尺にして、一黒魚を得、即ち烹て之を食ふ。旬日ならずして、翁、母並びに亡じ、又た長子を喪ひ、連ねて十餘口、馬十、牛四十に延び、死病狼藉たり。存する者大いに懼れ、他所に避くれば、禍乃ち息む。

鄭叟が土禁を犯す

平輿の南函頭村の鄭二翁は、強氣の性格で、タブーを信じなかつた。太和八年（一二〇八）、その家の東南に工事をしようとした所、ここは太歳神のいる所であるから、犯すべきではな

61 犯土禁…前近代において、建築、土木工事を行なつて、土地の神様から罪を受けることを「土禁を犯す」と言つた。『後漢書』來歴傳「時皇太子驚病不安、避幸安帝乳母野王君王聖捨。太子乳母王男、廚監邴吉等以為聖捨新繕修、犯土禁、不可久御。」宋洪邁『容齋四筆』繕修犯土「今世俗營建宅捨、或小遭疾厄、皆云犯土。故道家有謝土司章醮之文」。

62 平輿…県名である。今の河南省汝南県東南。

63 太歳…太歳神を指す。歳星（木星と鏡像の位置にある仮想の星）の神。祟りをなす神で、建設、引越し、嫁入り、遠出で、その方位を犯すと凶事が出現するとされた。漢王充『論衡』難歳「方今行道路者、暴病仆死、何以知非觸遇太歳之出也」。

いと言う人がいた。鄭二翁は「私こそが太歳神である。どうし

て忌む必要があるか」と言つて、人夫を督促し工事を行った。地面を二尺足らず掘つたところ、婦人の紅い刺繡入りの鞋が一足出てきた。人夫は工事をやめようとしたが、鄭二翁は怒つて靴を取つて燃やし、掘削をいよいよ急がせた。さらに二三尺のところ、一匹の黒い魚が出てきたので、すぐに調理して食べたところ、十日もしないうちに、鄭二翁とその母がともに亡くなり、さらに長男も死に、連続して家族十数人が亡くなり、馬も十匹、牛も四十頭が死に、死の病が蔓延した。生き残つた者は大変恐れ、よそへ避難したところ、禍はようやく収束した。

1. 10 張童 冥に入る

平輿の南函頭村の張老なる者は、鶉を捕ふるを以て業と為し、故に人目して鶉鶉と為す。年已に老い、止だ一兒のみ成童⁶⁴せるも、一旦死せり。翁媪は自ら老いて倚る所無きを念ひ、號哭悶絶して、俱に死せざらんことを恨む。明日之を埋めんと欲し、又た復た忍びず。但だ磚を累ねて邱を作り、地一二尺許りに入れ、云ふ、「吾兒よ還活せよ！」と。人其の癡なるを笑ひ、而して亦た之を哀む者も有り。三日にして復墓⁶⁵するも、慟哭休まず。忽ち墓中の呻吟の聲を聞き、翁媪驚きて曰く、「吾が兒

64 成童…年齢のややいった児童。或いは八歳以上、或いは十五歳以上と言ひ、一定しない。

65 復墓…前近代の習慣で、埋葬後三日目の家人の墓参り。唐段成式『酉陽雜俎續集』金剛經鳩異「貞元中、忽暴疾卒、埋已三日、其家復墓、聞塚中呻吟、遂發視之、果有氣」。

果して還魂せり矣」と。棺磚を撒し、棺木を曳きて出し、昇かきて其の家に歸る。俄にわかに湯粥を索む。良や久しくして、説けり、

「初め人の攝して冥司66に往くところと為る。兒は主者に哀訴するに、「爹娘は老いて念ふ可し。乞ふ、餘年を盡くさんことを。葬送畢らば、死するも恨を歸する所無し」と。冥官頗る之を憐み、即ち云ふ、「今汝を放ちて歸らしむ。汝が父に語れ、「能く打捕の業を棄つれば、汝の命は延ぶ可し矣！」と」と。其の父此の語を聞き、盡く綱罟の屬を焚き、兒を挈して寺に入り佛に供す。寺に一僧の呂姓なる者有り。年未だ四十ならず、儀表殊に偉なり。曾て州に上りて綱首と作る。張童即ち前すみて僧に問ふ、「師も亦た還魂ならんや」と。呂云ふ、「何ぞ曾て死せん」と。張童言ふ、「我 冥中に在りて引問せし次と、師の殿角銅柱の上に在りて、鐵繩足に繋り、獄卒往來して梶67を以て師の腋下を撞き、流血淋漓たるを見る。放歸せる時に及びて、曾て監卒に問ふ、「呂師は何の故に罪を受くるや」と。乃ち云ふ、「他は多く齋主の經文を脱下し、故に此の報を受く」と。呂聞きて大いに駭おどろく。蓋し其の腋下に一漏瘡を病むこと、已に三年たり矣。兒は初より知らず。呂遂に一室に潔居し、日び誦經を以て課と為す。凡そ三年、瘡乃ち平いゆ。趙長官68親しく之を見ゆ。

張童の冥界入り

平興県の南函頭村の張老は、鶉の捕獲をなりわいにしており、そのため人からはウズラと呼ばれていた。年をとって、十五歳まで成長した子供は一人であったが、ある朝、死んでしまった。老人夫婦は年老いて寄る辺のないことを思い、嘆き苦しみ、子供と一緒に死ななかつたことを恨んだ。明日埋葬しようとしたが、改めて埋葬するに忍びなくなり、ただレンガを積んで墳丘状にし、地面から一二尺許りの高さに棺桶を入れ、「我が子よ生き返ってくれ」と言った。その愚かさを笑う人もいたが、哀れに思うものもいた。三日目に墓参りをしたが、慟哭は止まなかつた。急に墓中からうめき声が聞こえ、老夫婦は驚き、「我が子はやはり生き返つたのだ」と言った。積んだレンガを撒き散らし、棺桶を引き出し、家にかついで歸つた。息子は果たして生き返つた。急にお粥を食べたいと言ひ、しばらくして次のように言つた。「初め、人に捕まつて冥界に連れ去られました。私は冥界の主催者に哀訴し、「父母は年老いて可哀想です。どうか、父母の余生に対して孝養を尽くさせてください。父母の葬儀が終わつたならば、死んでも恨むところはありません」と言つた。冥界の主催者は私のことを憐れんでくれ、こう述べました。「今、お前を解放して家に帰らせる。父親に『ウズラ取りのなりわいをやめれば寿命が延びる』と言え」と。父はこの話を聞いて、ウズラ取りのすべての道具を焼き捨て、息子を連れて寺院を詣で仏に供え物をした。寺には呂姓の僧侶がいた。年は四十前で、立派な風采をしていた。以前、州（平興県は南京路蔡州鎮南軍に属するので、蔡州をさすか）で、仏事的主催

僧となったことがあった。張の息子は僧侶の元に進み出て質問した。「先生も冥界から生き返られたのですか」と。呂はこう言った「どうして死んだことがあるうか」と。張の息子は言った。「私は冥界で質問された時、先生が宮殿の隅の銅柱の所で、足を鉄グサリで縛られ、獄卒が行き来して棍棒で先生の脇の下を殴り、血が流れているのを見ました。開放された時に、監視の役人に質問しました。『呂先生はどのような罪を受けたのですか』と。役人は言いました。『彼は、仏事の依頼者のための経文を省略して読み上げたので、その報いを受けているのだ』と。呂はこれを聞いて大変驚いた。もともと彼は脇の下に膿んだ傷があり、もう三年間も治癒しなかったのである。張の息子はこの事を全く知らなかった。呂はそこで一室に精進潔斎して閉じこもり、毎日読経をして過ごした。三年経つと、傷は癒えた。趙長官自らこの件を見たという。

1. 11 土禁⁶⁹二

乙巳⁷⁰の春、懷州⁷¹の一花門⁷²生は僕を率ゐて地を掘り、肉塊一枚を得。其の大きさ三四升許り。刀を以て之を割くに、肉は羊の如く、膚膜有り。僕言ふ、「土中の肉塊は、人言ひて太歳と為す。見る者は當に凶たるべし。掘るべからず」と。生云ふ、「我れ寧ぞ太歳有ることを知らんや」と。復た之を掘らしむ。又た二肉塊を得たり。半年ならずして、死亡相踵ぎ、牛馬皆盡く。古人之を「凶禍有るも故⁷³に之を犯すは、是れ神と敵する也」と謂ふ。申胡魯の鄰居親しく之を見、予が為に言ふ。

土禁の第二の例

一二四五年の春、懷州のあるウイグル族の若者が下僕を統率して地面を掘ったところ、肉塊が一つ出てきた。その大きさは三、四リットルほどであった。刀を使って割くと、羊肉のよう

69 土禁・注61参照。

70 一二三四年、金の滅亡。一二四一年、第三代オゴデイ急死。一二四六年まで、オゴデイの皇后ドレゲネが監国。一二二一年、ウイグル王、チンギス・カーンに帰順。チンギスは息女を娶らせ駙馬（キユレゲン）とする。以後、ウイグル王家は「ウイグル駙馬王家」としてモンゴル王族に準じる地位。モンゴル帝国および元朝では、ウイグル人官僚はモンゴル宮廷で重用され、経済を担当する大臣も輩出。

71 懷州…今の河南沁陽県一帯、当時は洛陽北面の重鎮であった。

72 花門…ウイグル族の別名。もともと山名で、居延海の北三百里にあった。唐初に堡壘が作られ、北方塞外民族の防衛戦となったが、天宝年間にウイグルに占領された。後に「花門」はウイグルの別名となった。

で、皮膚の膜があった。下僕は言った。「土中の肉塊を、人々は太歳と呼んでいます。それを見たものは必ず災厄に遭います。掘るべきではありません」と。若者はこう言った。「私は太歳が存在なんて全く知りもしない」と。引き続き掘らせた。さらに肉塊が二つ出てきた。半年も経たずに、死亡が相次ぎ、牛馬はすべて死んだ。古人はこのようなことを「災厄があっても故意にそれを犯せば、神秘的存在と敵対することになる」と言った。申胡魯の隣人が自ら見たことで、申胡魯が私に語ってくれた。

1. 12 群熊

癸卯の初、熊數十萬有りて、内郷⁷³硤石⁷⁴従り西南山に入る。枚を銜^くみて並進す。行くこと既に遠く、掌皆出血す。羸劣にして死する者有れば、群熊自ら之を食ふ。州縣に文移⁷⁶の傳報する有り。予彰德⁷⁷に於いて之を見たり。

群熊

一二四三年の初頭、数十万頭の熊が、内郷、硤石から西南の山に入った。声を上げることなく、並んで進んだ。遠くまで

73 内郷…県名、今の河南省西南部。

74 硤石…地名、今の河南三门峡市東南。

75 銜枚…静寂で声のしないこと。『文選』枚乗・七發「迴翔青篔、銜枚檀桓。」李善注…「銜枚、水無聲也。」

76 文移…文書、公文書。

77 彰德…今の河南安陽。

やってきたので、足はすべて出血していた。体が弱くて死んだものは、クマの群れ自身がそれを食らった。州や県の役所には文書で通知してくるものがあつた。私は彰徳でこれを見た。

1. 13 刀 花を生ず

濟源⁷⁸の關侯廟の大刀は、辛丑の歲、忽ち花を生ずること十許、莖は各おの長さ一指にして、纖細なること髮莖の如く、色微綠にして、其の顛細白花を作し、黍米よりも大なり。予が同舍李慶之の子正甫⁷⁹、予の為に言ふ。

刀に花が咲いた

濟源の關帝廟の大刀は、一二四一年に、急に十数本の花が咲いた。莖はそれぞれ一本の指ほどの長さで、髪の毛のように細く、色はやや緑で、先端に細くて白い花を咲かせ、キビよりも大きかった。我が同僚の李慶之の子息李正甫が、私に語ってくれた。

1. 14 龍を産む

平定⁸⁰葦泊村、乙巳の夏に、一婦名は馬師婆⁸¹、年五十許り、懷孕すること六年有餘にして、今年方めて一龍を産む。官司由

78 濟源…県名、河南省西北部。

79 李正甫…山西の人、詩が巧みであった。元好問の友人李慶の子で、元好問に「送詩人李正甫」詩がある。

80 平定…県名、山西省東部。

81 師婆…女性シャーマン。

る所を問ふに、此の婦説けり、「懷孕して三四年に至るも産ま
れず、其の夫曹主簿懼れて變怪と為し、即ち遣りて之を逐ふ。
臨産に及んで、恍惚中に、人従の其の前に羅列すること官府中
に在るが如きを見る。一人前みて自陳して云ふ、『寄託するこ
と數年、今當に捨て去るべし。明年阿母快活ならん矣』と。言
訖りて、一白衣之を掖たすけて去り、門に至り、昏くらくして人を知ら
ず82。之を久しくして乃ち甦よる」と。旁人為に説けり、「晦冥中、
雷の震ふるふ者三たび、龍は婦が身よ従り飛び去り、遂に身の孕みて
在る所を失へり」と。

龍を産む

平定の葦泊村で、一二四五年の夏に、馬師婆（馬という姓の
女性シャーマン）という年は五十ぐらいの婦人が、六年あまり
身ごもつて、今年はじめて一匹の龍を産んだ。お役人がその訳
を聞くと、婦人は次のように述べた、「身ごもつて三四年して
も産まれませんでした。夫の曹主簿は怪異を恐れて、すぐに離
婚し家から追い出されました。臨月になって、意識が朦朧とし
た中で、まるでお役所にいるかのように付き人たちが私の前に
並び立つのを見ました。一人の人物が進み出てこう言いました、
「あなたのお体に數年居候しましたが、今ちようど、あなたの
体を捨てて去るべき時になりました。お母様は明年元氣になら
れます」と。言い終わると、白衣の人物が、彼を支えて去つて

行き、門にたどり着いたところで、私は人事不省になり、しば
らくして蘇生しました」と。別の人物が彼女のためにこう言っ
た、「真つ暗な中で、雷が三回鳴り、龍が婦人の身体から飛び
去り、とうとう彼女は身ごもつたものを失ってしまいました」
と。

82 不知人…人事不省で、知覚を失うこと。晉 干寶『搜神記』卷
十五「會稽 賀瑀、字彥琚、曾得疾、不知人、惟心下溫、死三日、
復蘇。」